# 元気あおもり応援隊会議（福岡圏）

「元気あおもり応援隊会議（福岡圏）」を令和２年１月１６日（木）午後６時からソラリア西鉄ホテル福岡（福岡県福岡市）で開催しました。

当日は、７名の応援隊の方々が参加し、会議では「青森県基本計画「選ばれる青森」への挑戦－支え合い、共に生きる－」をテーマに意見交換を行いました。

その概要は、次のとおりです。

---

（青森県知事　三村申吾）

本日は、大変お忙しい中、「元気あおもり応援隊会議」に御出席を賜り感謝申し上げます。また、皆様方には、それぞれのお立場から、様々な場面で、「青森の元気づくり」に御支援をいただいており、厚く御礼申し上げます。

青森県では、これまで、「生活創造社会」の実現に向け、「攻めの農林水産業」の展開をはじめ、「経済を回す」取組を特に重点的に進めてきました。その結果、農業産出額や農林水産品の輸出額が堅調に伸びているほか、外国人延べ宿泊者数や創業・起業件数も増加するなど、様々な分野で取組の成果が着実に現れてきています。

また、本県の三内丸山遺跡をはじめとする「北海道・北東北の縄文遺跡群」の世界遺産登録に向けては、昨年１２月２０日に閣議了解がなされ、ユネスコへの推薦が正式に決定しました。応援くださいました全ての皆様方に心から感謝する次第です。これからいよいよ世界を舞台に挑戦していくこととなります。来年、２０２１年の世界遺産登録実現に向け、今後も関係自治体の連携のもと、万全の体制を整え、全力で取り組んで参りたいと思っています。今年は、イコモスによる現地調査があり、４道県が連携してしっかりと乗り越えていかなければなりませんので、ますますの応援をお願いします。

そして、今年度から新たに「青森県基本計画『選ばれる青森』への挑戦」がスタートしました。この基本計画の名称「選ばれる青森」には、若者や女性の県内定着・還流を促すため、学ぶ場所、働く場所、生きる場所として「選ばれる青森県」、また、農林水産品や観光など、様々な分野における本県の価値が国内外から認められ「選ばれる青森県」となることをめざしていくという強い思いが込められています。

青森県では、新しい計画の下、人口減少や高齢化が進む中にあっても、誰もが安心して働き、暮らしていける持続可能な地域づくりを着実に進めていきたいと考えています。

本日は、この計画の内容について説明させていただきますので、皆様方には、忌憚のない御意見、御提案を賜りますようお願い申し上げますとともに、青森県の更なるイメージアップや情報発信などへの一層のお力添えを重ねてお願い申し上げまして、挨拶とさせていただきます。

本日はよろしくお願いします。

【青森県基本計画「選ばれる青森」への挑戦－支え合い、共に生きる－】
※企画政策部長が、資料に基づき県の取組状況を説明

（知事）
青森でも食べていけるということを、特に若い方々に示すために、「経済を回す」ということを徹底してやってきました。その結果、「買ってよし」「訪れてよし」は、けっこう良いところまできましたが、実際に若い方々が定着してくれる、あるいは還流、戻ってきてくれるという「住んでよし」の部分がなかなか厳しい状況にあります。
ということで、「働く場」を示しながら、いろんな仕事ができて、いろんな生き方ができる多様性のある青森県だということを若い方々に理解してもらうだけではなく、保護者の方々や学校の先生にも、「青森にいても仕方ないというイメージは違うよ」「青森は変わってきたんだよ」と、理解してもらわなくてはいけないと思っています。
また、青森県民の中には、「青森には何もない」「周りから貧乏に思われている」というイメージを持っている方もいますが、調査をしてみると全然違っていて、県外の人は、食べ物にしても、観光の美しさにしても、暮らしやすさにしても、青森県はすごく良いところだというイメージを持っています。そういった外からのイメージと自分たちのイメージの大きなギャップや、保護者や学校の先生が持っている「青森にいてもどうしようもない」といった意識をどう埋め、どう変えていくかということに取り組んでいかなくてはいけないと思っています。
いずれにしても、「ここに生まれて良かった」「ここで暮らして良かった」と思える青森県をめざして頑張っていきます。首都圏以外はどこも同じような状況ですが、青森県はこれまでと比べて、あらゆる分野がめきめきと良くなってきているということは、本当に実感があります。これをどう表現し、伝えていくかということで、若い職員が庁内ベンチャー制度で提案した事業により、そのことを県民の皆さんにも知ってもらおうという取組が、新年度から始まる予定です。

（甲地史昌氏）

これまでの取組の成果についてお話がありましたが、素晴らしい勢いで実績として残っていて、非常に評価に値するものだと思います。また、今後の課題や取組の方向性、実現に向けての内容等、細かく説明いただきました。
これからの展開も資料で拝見しましたが、これを見ていく上で、もう少し具体性が欲しいなと。各項目に異論をはさむものではありませんが、いつ、誰が、どのような形で進めるかということで、少し角度を変えて見てみたいと思っています。
先ほどから、「若者」という言葉が出ていましたので、明日の青森を拓く、担うという観点から、５つの戦略プロジェクトの中から「『住みたいあおもり』若者・女性プロジェクト」を取り上げてみようと思います。

青森県の将来の人口推計が出されました。国の統計で現在１３０万８千人の人口が２５年後の２０４５年には８２万４千人になるという推計が出されています。本当に危機感を持たざるを得ないと思いますし、このたびの県の基本計画の中で最重要課題として人口減少克服を前面から取り上げて果敢に挑戦するという姿勢に非常に共感を覚えます。

この難題中の難題を少しでも解決するためには、やはり従来の手法あるいは組織や人も含めて、発想の転換を図っていかないといけないし、そういう覚悟が必要ではないかと思います。

まず、若者や女性が住みたい街というのはどういうものだろうかと考えました。やはり、子どもを産み育てやすい環境をつくることではないかと思います。そこには仕事や自然がありながらも、職住近接で、あるいは保育所や幼稚園のような育児環境があり、また、生活していくためには出会いの場がなければいけません。また、住民との理解と協力体制を築いていかないと、移住は増えてこないだろうと思います。全国の若者が理想郷を求めてあちこち移動しています。そういう意味では、やはり魅力ある街であるかどうかというのが問われるところだと思います。そこに住めば、少しでも、豊かで、便利で、良い暮らしが手に入ると思えるような場所を創出していく。これがなく、ただ課題を並べるだけでは、人は集まって来ないだろうと思います。

では、プロジェクトが成功するためにはどんな組織、システムが必要か。いつ、誰が、どのような形で推進すべきかということです。私はこれが一番大事だと思っています。もはや市町村単位で取り組むには限界があるので、県が主体で取り組む、または、知事をトップに独立したような形で進めるのが望ましいと思います。知事が先頭に立つことで県民の意識も変わり、内外への宣伝効果も絶大です。青森の将来に期待が持てるようになるだろうと思います。

続いて拠点についてです。「選ばれる青森」という説明がありましたが、実現には人も金も物も必要です。現状では、青森県全体にくまなく展開することは難しいと思いますので、東青、中南、三八、西北、上北、下北の６地区に重点的に拠点を設けて、できるところから始めていけばいいと思います。人が集まるところ、道の駅や病院、空港周辺、温泉など、世界遺産の白神山地も含め、工夫を凝らして集まってもらうのが大事ではないかと思います。

最後に、このプロジェクトを推進するにあたって、定義づくりと住民の理解、責任、役割というのが本当に必要だと思っています。

県民は、今でも「県が何かをしてくれる」という意識が強いのだろうと思います。どの地域でもそうですが、自分ができることには積極的に取り組むという意識醸成を粘り強く行い、１つの核を作り、そこに人材を投入することで大きな成果をあげられるのではないかと思います。私は、みちのく夢プラザの職員とも話をしますが、優秀で情熱を持った行動力のある職員を配置して、「選ばれる青森」を創出するために、粘り強く進めてもらいたいと思います。高齢者にも何か声を掛ければ、喜んで青森の未来のために頑張ってくれると思いますので、ぜひ、そういう協力者と共に一体で進んでいけばいいなと思います。

今日は、きめ細かくいろいろ説明がありましたが、これをどういう形で進めるかということに注力してもらいたいと思います。

（知事）

具体的に、４点お話いただきました。

青森県は、アジアも含めたいろんなところとのつながりを持っていて、住む価値があることや

特徴ある生き方、暮らし方ができることをどんどんお知らせしていきたいと考えています。東京やマスコミの価値観に踊らされないで、食料とかエネルギーとか、様々なものをしっかりと確保しながら、自分たちの特徴を強く打ち出していきたいと思っています。

（企画調整課）

若者にとって住みたい街ということで、青森県としても、まずは若い人たちを含めて、青森県で多様な暮らしができることを伝えていきたいと思っています。

そのためには、まず、青森県の中でしっかり暮らしていける、生業を持って暮らしていけるという姿をつくり、その上で、県内定着や還流を進めるということで、いろいろな取組をしています。

先ほどの説明にもありましたが、青森の生活の魅力を例として挙げますと、通勤時間が短いという点があります。神奈川県の１１０分に対して青森県は５９分。全国６位の短さです。また、全国２番目に住宅地が安く、住宅が広い（全国６位）、公園が多い（全国８位）といった事実もあります。

そういった意味で、青森も暮らしやすさの部分では、特徴を持ってお勧めできるところがあります。若い人や女性が青森県から出て行くという課題も、そこに気が付いていないという背景があります。一旦、首都圏に行って、勉強したり働いたりする中で、ふと青森県の良さに気が付いて戻ってきてもらえるかもしれないので、実際、そういう方もどんどん増えてきていますが、そういった方々にいろんな魅力や情報を提供して、一緒に青森県で暮らしてもらえるよう、取組を進めたいと思っています。

（労政・能力開発課）

本県の取組を紹介します。

県外にいる青森県に縁のある方や青森県出身の方に対して、県内就職や移住を促進するために、毎年８月に移住イベントを開催しています。こちらは、各市町村とも連携しながら、庁内の関係課や民間企業も一体となって、「オール青森」の体制による「青森県合同移住フェア」を開催しているほか、お互いのネットワークなどを通じて、効果的に情報発信するなど、県も市町村も一緒になって連携して取り組んでいるところです。

このほか、若者の流出が激しい状況下で、高校生向けに企業のＰＲ会などを行い、企業の魅力や青森で暮らす・働くことの優位性などを積極的にＰＲしています。

また、女性が暮らしやすい、働きやすい青森県ですので、県内民間企業の女性社員等の皆さんによる「あおもり女子就活・定着サポーターズ」、通称「あおもりなでしこ」を結成しています。「あおもりなでしこ」の皆さんには、青森県で女性が活躍しながらキャリアアップできるということを、大学生や高校生など、若い世代の方々にイメージしてもらうため、それぞれの言葉で伝えてもらう交流会などを県内３地区で行っております。

引き続き、こうした取組を強化していきたいと思っています。

（知事）

４項目について御意見をいただきましたので、しっかりと良い方向で活用させてもらいたい

と思っています。

（長根寿陽氏）

私からは、「多様なしごと創出プロジェクト」をテーマにお話しします。

私は前回の会議から肩書きが変わっていますが、２年前からこれまでのキャリアを生かし、今は福岡に住みながら、福岡、熊本、佐賀、東京、岐阜、愛知、三重にある５つの会社と２つの団体、２つの大学で仕事をしています。今はインターネットが活用できる時代ですので、その場にいなくても、ＩＴを利用していろいろな仕事ができるというのを、自ら体験しています。

こういったことを踏まえて提案したいことは、人口が流出していったり、若い方がなかなか来なかったりということがありますが、逆にインターネットやＩＣＴによって、そういった方たちの意見や知恵を活用できるのではないかということです。

昨今、働き方改革を国も推進しているようで、その中で副業について、今まで副業はどちらかというと禁止する傾向にありましたが、最近は大手企業は副業推奨の方向で、特に、地域の活性化につながるようなものは、企業のＣＳＲ（社会貢献活動）としても良いこととして推奨する方向性にあるので、より積極的に取り入れてはどうかというのが私の提案の１つです。

これから５Ｇという新しい通信規格も始まりますし、一箇所に集まらなくても、自宅や職場にいながら、例えば、５時半になったら青森県のプロジェクト会議に参加しようと呼び掛けて、インターネットなどで青森出身者の知識を集めることもできます。人口流出に歯止めをかけるのはものすごくいろいろなことをしなくてはならないと思いますが、知識の流入という部分は、ＩＣＴを使うことで比較的容易に実現できるプロジェクトの１つではないかと感じています。

そういった、ふるさと青森に対して自分の経験と知識を使うことに青森の「ふるさと“脳”税」とキャッチフレーズをつけてみました。「脳」は、知識で地域に貢献するといった意味で、インターネットを活用して若い年代の流出ではなく、県外にいる方の知識を流入し、県外にいるからこそ分かる青森の魅力なども発信するプラットフォームみたいなものをつくってほしいと思いますし、やってみる価値があるのではないかと感じています。

（知事）

５Ｇ時代を先取りした内容で、お金ではなく、自身が持っている様々な知見や人間関係を「ふるさと“脳”税」という形で提供してもらうという、非常に斬新なアイデアだと思っています。

ＩＣＴの活用については、担当から話をさせてもらいますが、お話にあったようなつながりがあれば、逆に、「青森に帰ってこない？」と言えるのではないかとも思いました。

特に医療系では、病院という「箱」が問題になるのではなくて、スペシャリストとどうネットワークでつながっているかで、その地域の医療構造が良くなるという話もあり、本当に驚いています。劇的に変わってきていまして、医療は「箱」ではなく、診断も手術も含めて、例えば５Ｇを導入することなども考えられるようです。まさに、「つながり」が重要だということのようです。

（新産業創造課）

御提案のとおり、ＩＣＴを使えば、遠隔参加で本県に縁のある人材を活用することができると思います。

県としては、県内のＮＰＯと協力しつつ、首都圏在住の方に、本県でのテレワークやリモートワークの事例について実際にそこで働いている方から説明した上で、県内のＩＴ企業と交流しながら企業の内容を知ってもらうイベントをやっています。

その結果、仙台市に住みながら、三沢市のプログラミング企業に所属してリモートワークで働いたり、逆に東京の企業に所属したまま、青森にＵターンして働いたりしている事例など、少しずつ生まれ始めています。

これまで交流イベントは東京でしか開催していませんでしたし、まだ不十分なところもあります。御提案いただいたような副業の視点や相互の知の交流も踏まえ、新しい産業を青森で創出していきたいと思っています。

（企画政策部長）

今、副業という視点、また、青森に住んでもらうのは難しいけれど、せっかくのつながりを生かすという、非常に参考になる御提案をいただきました。距離や時間をあまり気にしなくて済むＩＣＴの活用は、これから５Ｇで通信速度も上がりますし、私どもも参考にしたいと思います。

移住相談会などを行いますと、大勢の青森ファンの方々が来てくれるので、これまでは「何とか青森に来てください」というアプローチをしていましたが、「青森にはそう簡単に行けないけれど青森とつながりたい」「青森のために何かしたい」という声はたくさんありました。最近、自分の都合のつく時間、タイミングを使って、地域で自分のスキルを役立てようという、まさに、移住まではいかないが、観光で遊びに行くのでもなく、地域と関係を作って活動しようという取組が始まっています。国は「関係人口」という言葉を使っていますが、最近本県でも地域の会社やＮＰＯ、団体などが抱える課題に対応できるスキルを持った「関係人口」をつなぐようなプロジェクトを始めています。

現在、１０件ほどの課題に応募があり、都合のつく時に青森に来てもらい、フェイス・トゥ・フェイスで課題を聞いて、それ以外は、インターネットやメール、あるいは映像や電話でやり取りしながら、いろいろな提案や悩みに対応するというものです。役に立ちたいという思いと、何とかしてほしいという願いが組み合うことで、青森県の交流がまた一つ増えていくのではないかと思っていますし、それが、いつかは青森に、というところまでつながっていけばいいなと思いながら取り組んでいますので、ぜひ、プロジェクトの中に合うものがあれば、御協力いただきたいと思います。

（知事）
本当に次の時代に向かっていく流れだと思っています。
いろいろ工夫をしながら、できることをやっていきたいと思っています。

（長根氏）
実は、世界各国には青森県人会があり、おそらく公的なものではなく、現地の青森県出身の方が集まっているのだと思います。ＩＣＴにより世界とも簡単につながることができますので、発展形として、将来的には「元気あおもり応援隊ｉｎワールド」のようなものも呼び掛けてみると、意外に皆さん参加してくれるのではないかと思いました。

（知事）
そういった点も含めて参考にさせてもらいます。

（百合野博氏）

私は、野菜、果物を市場で取り扱っており、青森の野菜、果物を九州全体に供給しています。知事とともに、今まで青森県産品の販売を一生懸命やってきました。青森県にはにんにくやながいもなどの野菜がたくさんあり、りんごは７００億円を上回る大きな産業なので、知事が力を入れているのは当然だと思います。我々は一緒になって台湾、香港へも輸出しています。

そういう意味では、青森県産のりんごは選ばれていますが、選ばれていく過程ではいろんな取組をしました。東京の市場の人からは、赤系のりんごが９割、青系・黄色系のりんごは１割でいい、１割以上持ってくるなと言われます。でも、生産者からすれば、赤系は大変手間がかかりますが、青系・黄色系は手間をかけなくても収穫できます。生産者も高齢化が進んでいるので、青系や黄色系も作りたいという産地の意向を踏まえて、私なりに、そうしたりんごを売るために、知事と一緒に王林の歌を作って「ふじより甘い王林」などとＰＲしてきました。

やはり、攻めるためには、まず、選ばれなくてはいけません。

さくらんぼの新品種ということで「ジュノハート」の紹介がありましたが、私もブランド化推進協議会に呼ばれ、「ブランド化への近道は、デパートや高級果物店で誰が見ても大きくてハート型だ、こんな美味しそうなさくらんぼは見たことがないというさくらんぼを作って供給すること」「さくらんぼは、甘いとか酸っぱいとかまずいとかではなく、デカくないともう駄目だ」と話をさせてもらいました。今年から出荷量が増えてくると思いますので、我々も大きなさくらんぼを販売したいと思います。

その一方で、大きくなる実もありますが、おそらく小さい実もたくさんできると思います。大きい実だけ売って、小さい実は青森で何とかしてくださいというわけにもいかないし、さくらんぼの加工品というのは、それほど需要がないと思いますので、小さい実がたくさん出た時に、知恵を絞って一緒に販売していかなければと思っています。

（知事）

「青天の霹靂」は米だから日持ちがするので、長期的な戦略を立てられますが、「ジュノハート」はさくらんぼですから、２週間の短期決戦で、佐藤錦などが圧倒的に多い中でやっていかなければなりませんので大変だと思っています。

（農林水産部長）

「ジュノハート」は、御覧になったことがない方もいるかもしれませんが、４Ｌサイズ、直径で３１ミリ以上の大きいサイズがかなり収獲できます。もちろん、形は「ハート」という名前が付いているとおりハート型で、令和元年産から県内デビューし、昨年６月２９日に県内でイベントを開催しました。その中で特に大きくて色の良いものを「青森ハートビート」という名前を付けて、２個１,０８０円で販売しましたが、すぐ完売という状況で、大変好評でした。

令和２年産は、昨年の約４倍の数量が生産される予定です。まだまだ少ないですが、首都圏、関西圏の主な店舗においてＰＲイベントをしながら販売していくことを考えているところです。

小さいさくらんぼも当然できるだろうということでしたが、このジュノハートについては、特に大きいさくらんぼを作っていこうということで、りんごと同じように、開花の時から摘果をやっていきます。ですので、通常のさくらんぼであれば、木にたくさんの実が付くのですが、摘果で花を摘んで、さらに小さい実を摘む作業をしていくことで、ある程度小さいものは抑えることができると考えております。ただ、全てがそうなるわけではないので、そういった規格外のものや傷が付いているものについては、試験研究機関と連携して、付加価値の高い加工品を開発しようと、今、検討を進めているところです。

これから、どんどん生産量が増えていくと、当然九州でも販路を拡大させてもらわなければなりません。いろいろ御指導、御協力いただくことになろうかと思いますので、よろしくお願いします。

（知事）

試験研究機関だけでなく、生産者もみんなやる気満々で、面白いことになりそうですので、ハートビートもジュノハートも頑張りたいと思います。

（司会）

以上で県の取組説明及び意見交換を終了させていただきます。

ありがとうございました。